



第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

松下, 正和 ; 木村, 修二 ; 奥村, 弘 ; 添田, 仁 ; 坂江, 渉 ; 河野, 未央

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 9(平成22年度事業報告書):40-43

(Issue Date)

2011-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002927>



第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用 事業

歴史資料ネットワークへの協力・支援

1、2009年8月台風9号水害関連

2009年8月に発生した台風9号は、兵庫県佐用町・宍粟市・朝来市、岡山県美作市を中心に住宅被害・人的被害をもたらした。災害救助法が佐用町・宍粟市・美作市に適用されたのを受けて、当センターメンバーは史料ネットと協力し、佐用町教育委員会藤木透氏や宍粟市教育委員会田路正幸・垣内章両氏と連絡を取り合いながら、史料ネットメンバーとともに被災地での救済活動を進めることとなった。具体的な成果については、昨年度の報告書や『LINK』2号の小特集をご覧ください。

今年度は昨年度に引き続き水損史料に対する応急処置と所蔵者への返却を進めるとともに、救出史料を活用した取り組みとして、被災地の住民に対する現地説明会や博物館での展示をおこなった。また、被災地の地域史研究会との出会いを契機として、地域の古文書を研究会のメンバーと協力しながら整理する試みも新たにスタートすることとなった。以下では、これらの活動の成果と課題について記す。

①被災史料の応急処置 真空凍結乾燥済みの佐用町 Y 村区有文書の脱臭処理のため、藤木氏に固着展開や空気接触による臭いの緩和処置を依頼した。また、修復工房レストア（株）の協力を得て、同町平福 T 家の酸性劣化により断片化した賞状の裏打ち処置をおこなった。さらには、神戸大学購入の真空凍結乾燥機を使用する環境も整い、サンプル史料の乾燥を行いながら、乾燥機の性能実験を進めることができた。脱臭の問題については、不織布で史料をはさみ糊刷毛でなでながら水で洗浄するというウェットクリーニングの方法を利用することで、ある程度解決することが判明したことも成果であった。

②救出史料の返却と現地説明会 佐用町 Y 村区有文書、平福 T 家賞状、中上月 T 家史料については所蔵者に返却することができた。また9月5日には宍粟市一宮町 U 地区において、自治会文

書の内容を解説する現地説明会を開催した。板垣貴志・吉原大志両氏による文書解説と、修復した絵図などの自治会文書や当時の被害状況を撮した写真などの展示がおこなわれた。

③救済史料の活用 佐用町中上月 O 家から救出した史料を用いて、中岡宏美氏が嘉永年間に関する飢饉と村の対応について、川内淳史氏が播磨発行の地域新聞から昭和初期の佐用郡に関する動向について論文を執筆した。その成果は『歴史と神戸』に掲載予定である。また、今年度は博物館と協力しながら、救出史料や救出活動自体を展示することができた。兵庫県立歴史博物館の「水損した歴史遺産を救う—2009年台風9号豪雨被災古文書を中心に—」（2010/3/2～5/5）、国立民族学博物館の「歴史と文化を救う 阪神淡路大震災からはじまった被災文化財の支援」（2010/7/22～9/28）、吹田市立博物館の「災害から地域遺産をみなおす ～吉志部神社の復興～」(2010/10/9～11/28)である。

④その他 また、被災地の佐用郡地域史研究会との出会いを契機として、地域の古文書を研究会のメンバーと協力しながら整理する試みも新たにスタートすることとなった。水濡れ史料吸水乾燥ワークショップも約20回おこない、素人でも可能な応急処置方法の普及活動を今年度も進めることができた。

未返却史料は佐用町久崎 H 家の年貢免状・皆済目録を残すのみとなった。来年度は、購入したリーフキャスティングを活用したすきばめの実施や簡易なふすま下張りはがし処置など、緊急時の被災史料の応急処置法の開発とともに、生活復興と密接な関連をもつ資料保存の意義についての提起などを史料ネットとも協力しながらおこなっていききたい。（文責・松下正和）

2、神戸市兵庫区平野地区における調査と活動

平野地区での活動の中心は、地元の有志で構成された平野歴史クラブが母体となって結成されている「奥平野古文書勉強会」への参加である。

2010年2月に第1回目を行って以来、ほぼ1ヶ月に1回のペースで開催されてきており、本年度も同様のペースで開催されてきた。すべての例会で木村がチューターを行っている。参加者の実力は確実に上がってきており、テキストの進み具合も相当早くなっている。

なお年度末にあたって、次年度以降の実施について参加者と協議した結果、体制を若干変更して次年度以降も継続することが決定された。会員は、ほぼ12名に固定している。

(文責・木村修二)

兵庫県公館県政資料館歴史資料部門との連携事業

本年度も、奥村が兵庫県公館県政資料館歴史資料部門運営専門委員として、県政資料館の運営の支援を行った。本年度で、奥村は同専門委員の任期を終了したが、県政資料館は財政難を理由として、同専門委員制度を廃止し、さらに紀要である『新兵庫県の歴史』の発行を停止するとした。

県公館の兵庫県内での地域歴史資料保全活用についての位置は極めて高いだけに、この縮小は県下の歴史文化において様々な困難をもたらすと考えられる。今年度、本研究科と兵庫県教育委員会との間で連携協定が結ばれたが、この分野での協力についても考えていく必要がある。

(文責・奥村弘)

石川準吉関係資料の整理

生野銀山の南、森垣村石川家出身で、生野鉱山史研究の第一人者であった石川準吉旧宅(目黒・藤沢)にのこる約5,000点の新出史料群(石川通敬氏所蔵)の概要調査(資料の表紙を撮影し、目録を作成する作業)を行った。

調査の日程、参加者については、以下の通り。

- 第1回(2009年度)2010年3月17-18日
参加者:奥村、三村、添田
河島(18日のみ)
- 第2回 2010年5月24-25日
参加者:三村、前田、川内、添田
奥村、板垣(24日のみ)
- 第3回 2010年7月27-28日
参加者:深見、澤井、井上、添田
三村(27日のみ)
- 第4回 2010年9月16-17日
参加者:三村、金玄、三角、添田
- 第5回 2010年11月30-12月1日
参加者:三村、深見、金玄、添田
計3,640点の表紙写真を撮影し、概要目録を作成し

た。また、一部は古文書箱に詰め、三菱トランクルームに移管した。

2011年2月8日、三菱トランクルームにおいて石川通敬氏とお会いし、来年度も引き続き整理作業を続ける旨を確認した。

なお、石川準吉関係資料の一部(目黒分)は、朝来市生野書院で開催した企画展「再発見 銀山の遺産 -森垣村石川家に受け継がれてきたもの-」(2011年2月19日-4月3日)で展示した。

(文責 添田仁)

淡路市育波地区公民館保管文書の調査

同文書群は2009年2月に淡路市育波・高田知幸氏より調査依頼があったのを受けて、同年3月17日現地調査を実施している。そして2009年度中に整理をほぼ終えていたが、その後史料目録を整備し、史料解説などを用意して、2010年9月9日にいってようやく所蔵者である高田知幸氏に返却することができた。

本文書群の総計は55点。うち、近世のものが20点、明治以降のものが34点、1点が不明(断簡)だった。本文書群は、淡路国で7000石余を知行していた阿波藩筆頭家老稲田家の領分である育波村の文書である。私的な文書はほとんどなかったが、残念ながら村方史料としてのまとまりは全く失われている。震災被害の激しかった地区なので、今後、本文書群の欠を補う文書群が新たに現れるかどうかはわからない。

ただ、われわれが調査にあたる以前に、文書群の一部が所蔵者自身によって徳島県立文書館に寄贈したものととのこと(未調査)なので、それらをあわせて、今後調査を実施する余地がある。

(文責・木村修二)

豊岡市における調査事業

今年度は豊岡市自体との関係構築に関しては進展をみなかったが、別項(第11章参照)でも述べる科研「前近代日本における歴史的景観形成についての災害文化論的アプローチ」(研究代表者:木村修二)の調査の一環として、今年度は、7月27日から28日にかけて但東町における調査を行った点にふれておこう。

まず、27日は、日本モンゴル民族博物館(但

東町中山)に収蔵されている奥赤地区の小西家文書の整理・撮影をおこなった。同文書群は、2004年の台風 23 号によって土砂崩れ被害に遭われた同家でからくもレスキューされた文書であり、本来あった同家文書の全体からみればわずかに過ぎないとはいえ、今となっては貴重な史料群である。また、翌 28 日には奥矢根地区に向い、同地区の区有文書の処置・ダンボール詰め替え作業等を実施した。今回の作業では、内容を精査しての整理作業に至らなかったが、今後、近隣の矢根地区の区有文書や、大石武兵衛家文書とともに可能な限り調査を継続してゆきたい。

なお、旧日高町域に所在する浅倉地区の田尻早苗家文書および田尻一雄家文書に関しては、別項歴史資料ネットワークへの協力・支援の項で触れられるので、ここでは省略する。

(文責・木村修二)

養父市大屋町の資料救済と調査・整理事業

養父市(教育委員会)との間では、今年度、共同型協力研究「大規模史料群(明延鉦山資料)の詳細調査」事業が行われた。

その研究目的については、同市が現在、旧大屋町に所在した明延鉦山を、国の文化的景観に推進する計画を進めており、「明延鉦山資料等の整理や目録作成を行い、日本最大の錫鉦山として栄えた明延鉦山の基礎的な研究を推進する」ことと定められた。

大学側の研究代表者は本学の奥村弘教授。養父市側の研究代表者は同市教育委員会社会教育課の谷本進主幹。主たる研究補佐員として、尼崎市立地域研究史料館嘱託職員の島田克彦氏を任じ、現地での具体的な作業を委ねることとした(研究期間は平成 23 年 1 月 4 日～3 月 31 日)。

(1) 今回の事業の発端

もともと主たる研究補佐員の島田克彦氏が、旧『大屋町史』の執筆委員(近現代史担当)として、同町史の執筆・編纂に関与していた。その際、十分な史料整理や調査研究ができなかったにもかかわらず、同町史編纂委員会は平成 22 年 3 月をもって解散。その後、大規模な関連史料の散逸を懸念した島田氏は、教育委員会にも相談をもちかけるほか、本センターにも協力を依頼し、以下、本センターと養父市教育委員会とが共同し

て、一連の作業をおこなうことになった。

(2) 資料群の事前調査

まず平成 22 年 10 月 6 日に、島田氏のほか、本センターの松下正和・坂江渉が、養父市教育委員会の谷本進氏らの案内のもと、旧大屋町内の史料群全体の概略調査。調査終了後、谷本氏から大規模史料群の安全な場所への移動、および概略調査の共同事業の提起がなされる。

その後、12 月 24 日、正式に養父市から神戸大学に対して、共同型協力研究の申し込みが行われ、事業の具体化が決定。さらに平成 23 年 1 月 12 日、今回の研究対象史料群の現況調査を実施して、史料の移管場所や整理作業場所などを決定(島田・松下・坂江のほか、養父市側から谷本進氏・三島謙二氏・岸田明美氏・上垣悟氏らが参加)。

(3) 調査事業の経過と調査成果

旧大屋町内の稚蚕飼育所ガレージ内にあった関連史料(そのうち 2 箇所に分置保管されていた史料群を A 群と B 群と仮称)を順次、現在廃校の旧南谷小学校の多目的ホールに移動する作業を実施。その際、一旦、史料群を「明延自然学校」の一室に仮安置して、整理作業をおこなった。



整理作業は、平成 23 年の 1 月 26 日、2 月 14 日～15 日、22 日～23 日、28 日～3 月 1 日、8 日～9 日の 9 日間実施。この間、史料群仮目録の作成、箱詰めの仕分け、箱台帳の作成等の作業を島田のほか、養父市の三島・岸田の両氏、明延自然学校の有志、および明延区民の協力を得ておこなった(1 月 26 日は松下、3 月 1 日、8～9 日には坂江も参加)。

この結果、仮称 A 群の 115 箱分の詰め替え、仮称 B 群の 70 箱の詰め替え作業、および目録整

理作業が終了し、約 120 箱分の未整理分を残すだけとなった。いずれの史料箱とも、現在、前記の南谷小学校にて保管中である。

本事業の研究成果や調査所見については、年度末に提出される「成果報告書」（島田氏が作成予定）に記される予定だが、場合によって散逸する可能性のあった史料群を、一連の事業で救済できたことはきわめて大きい意義をもつと思われる。

なお次年度以降の事業等のすすめ方については未定である。（文責・坂江渉）

田淵家文書の借用・調査

2011 年 1 月 18 日、松下正和・木村修二・河野未央の三名が、神戸大学工学部名誉教授多淵敏樹氏所蔵文書の調査を実施した。多淵家は安志藩の藩士家であり、近代以降は戸長を務めていてその関連史料が残っていた。当日協議した結果、所蔵文書を一時センターに借用することとした。今後調査を進める予定である。（文責：河野未央）

2010年度日本考古学協会兵庫大会の開催協力

日本考古学協会の 2010 年度大会が、2010 年 10 月 16 日～17 日、兵庫県の明石市と播磨町を中心に開催された。このうち初日の第 1 分科会については、「播磨国風土記と祭祀」というテーマが立てられ（コーディネーターは櫃本誠一大手前大学教授）、本センターの坂江渉が報告者の 1 人に選ばれ、「文献史料からみた古代の呪術・祭祀 — 播磨国風土記を中心に —」という報告をおこなった。



同会は、文系では日本最大級の学会の 1 つだが、大会当日には全国各地からたくさんの会員や市民が集まった。本大会については、センターが後援団体の 1 つとして名を連ねた。

またパネル・セッション会場では、多くの文献史研究者と地元考古学者との協力にもとに展開された、佐用町での資料救済の様相（台風 23 号時）を掲載する「史料ネット」のパネル展示も行われた。（文責・坂江渉）

第 4 章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

2011 年 02 月 21 日、人と防災未来センター 西館ガイダンスルーム 2 で、第 11 回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会が開かれた。参加者は 19 人であった。

今回の研究会では、2011 年 1 月に刊行された『阪神・淡路大震災像の形成と受容 震災資料の可能性』（板垣貴志、川内淳史編著）を取り上げ、高野宏康氏（国立歴史民俗博物館研究員）、定池祐季氏（人と防災未来センター研究員）による書評がおこなわれた。

休憩をはさんで、末松憲子氏（人と防災未来センター資料室から資料専門員）から「資料室の現状と課題～新聞脱酸」が、三村昌司氏（神戸大学大学院人文学研究科助教）から「神戸市震災関連行政文書整理の現状と課題」が報告された。

そののち、書評でとりあげられた『阪神・淡路大震災像の形成と受容 震災資料の可能性』の編者、論文執筆者たちを含め、意見交換がおこなわれた。

定池祐季氏は、その書評の中ではじめて、1993 年 7 月 12 日北海道南西沖地震現地調査他の災害、奥尻島の津波災害について、映像を含めて紹介された。これまで、当研究会では、阪神・淡路大震災の地震災害にのみ目をむけていたが、はじめて津波災害という他の災害による被害状況を考察の対象とした。「奪い去っていく災害」との表現で、残らない資料の中から、どのように、災害を伝えていくかという課題を提示された。また、高野宏康氏は、関東大震災研究との比較の中での阪神・淡路大震災研究の書評であった。